

## 流れる地下水

——小林昌廣さんを通してIAMASを振り返る

安藤泰彦

小林さんと共にIAMASに在職していたのは、2007年から2019年の12年間でした。この間、日本とIAMASには激震（亀裂？）が走りました。前者は文字通り「3.11」（東日本大震災）の大地震。IAMASでは、2008年大学基準協会による認証の保留、それに続く2011年のアカデミーの募集停止、2014年のソフトラピア移転という一連の事態です。今から振り返ると、このアカデミー廃止は、IAMASにとって極めて大きいものでした。それはある種独特の異質さを携えていた場所が普通の大学院へと徐々に変貌していく端緒であったように思うからです。

アカデミーと大学院が併設され、共同授業も行われていたこと、これらは大学院を内部から異化する極めて大きな要素だったように思います。比較的カリキュラムに余裕があったアカデミー学生は結構自由に活動しており、そのことが大学院生にも大なり小なりの刺激を与えていました。在任当初は小林さんとのゼミにもアカデミーの学生が参加することもありました。年度末の終了・卒業制作展における共同展示や、小林さんが総合ディレクターとして大垣市街地で開催した2008年、2010年の「岐阜おおがきビエンナーレ」でも、アカデミーの存在は大きかったように思います。

2008年のビエンナーレのタイトルは『流れる』でした。勿論「水都」と呼ばれる大垣を意識してのこ

とであり、また小林さんの成瀬巳喜男監督（幸田文原作）の映画『流れる』も暗に含んでのことだったのでしょう。でも実はこの間のIAMAS内の流動（激流？）が背景にあったのではないかとも思えてくるのです。そう考えれば2010年の『温故知新』も意味深なタイトルに思えてきます。街の中心を通る道路に舞台を設置し、その上で舞踏を上演したのも『温故知新』でした。小林さんならではの度肝を抜く「メディア(身体)」アートでした。

在任当初は専門に応じて教員・学生が割り振られるスタジオ制でした。小林さんと私の所属は「スタジオ4」。懐かしい名前です。「メディア美学」ということで、論文中心などとは謳ってはいたけれど、どちらかと言えば、IAMAS内の「逃げ込み寺」あるいは「避難所」に近い存在であったように思います。これは決して否定的に語っているわけではありません。入学前に思っていたよりもプログラムが難しいことに気づいた学生、あるいは他のスタジオとソリが合わなかった学生などなど…、色々あったと思います。でもそのような学生がスタジオに入ってくることを結構私たち二人とも楽しんでいた気がするのです。考えてみればそれは当たり前のことで、学校が一つの方向で纏まったとしても、それに違和感や疎外感を持つ学生は常に存在します。少なくともアート、表現を掲げる場所であるなら、逆にそれらの違和感こそが大切であるとも思っていたからです。

元々、情報産業による地域活性化を目指していた岐阜県とメディアアートを興隆するという大学の方向性は微妙に異なっていました。そこにはすでに相異なる要素が混在していました。莫大な予算をつぎ込んだ「メディアアートの聖地」と呼ばれていた時代は、2000年代に入ると既に峠を越し、学生の興味や関心も多様化していたのかもしれない。

2011年あたりから徐々にスタジオ制が解体され、2013年にはプロジェクト中心のカリキュラムになっていきます。プロジェクト自体を否定しているわけではないのですが、





このプロジェクトという言葉は、工学系・社会学系にとっては馴染み易い概念であるだけに、実は曲者です。アート表現にこの言葉を適用する

ためには、「投-企」といったプロジェクト概念の拡張が必要なのですが、なかなか納得してもらうことは難しい。

そんな中で、学生・教員が集まって話したり文献を購読するゼミのような場を確保するため、二人で立ち上げたのがATPプロジェクト（Art Thinking Project）でした。ATPは、「アートを考える」だけでなく「アートで考える」という意味を含んだ造語です。生物エネルギーの貯蔵庫の意味も含んでいます。こんな言葉あそびは好きでしたが、モノや言葉が複数の意味を持つことってアートにとってとても必要なことなのです。「それってプロジェクトなの？」とも言われましたっけ？

きっと、そうなのです。何か訳がわからないような場、余分に思われるような場、どこかしら収まりが悪い場、異なる要素が入り込む場、表面からは見えないような場、そんな場や時間が大学院に限らず学校という場には必要なのです。

このことはIAMAS校舎という学習環境にも言えることです。2014年にIAMASは、領家町の校舎を離れ、ソフトピアに移転します。元の校舎の良さは、決して有名建築家の設計によるマルチメディア工房ではありません。元「大垣第一女子高等学校」の雰囲気を残し、めったに使われない教室が多く残り、かつての匂いがどこからか漂う、卒業生がいつからか居住していたという噂も出てくるような場所、そのような場所が持つ力の重要性を意識することと無縁ではありません。

ほとんど小林さん本人のことを触れずに書いてきました。彼自身については、研究室が書籍とフィギアで満載であったとか、頭の中も研究室そっくりで

情報の図書館であったとか、非常に多くの学生の論文を指導されてこられたとか沢山あると思います。これらはきっと他の方が書いてくれるでしょう。

その中で、あえてIAMAS自体の変遷と、そこで見失われていったものをあげたのは、彼が占めていた場所の重要性を示すために他なりません。幾分、格好良く言えば、それはIAMASという場を支える地下水の流れ、あるいは地表に現れたり隠れたりする伏流水なのです。

2024年12月

あんど う やすひこ

元IAMAS同僚（2007-2019）。元IAMAS教授、スタジオ4、地域文化研究プロジェクト、ATP所属。現代美術作家「KO-SUGI+ANNDO」としてインスタレーション作品を制作。展覧会企画運営や作品『BEACON』（1999～2020）などに関わる。近作として『搜神譚』（2024）。